

SONRISA
そんりさ

Vol.159



グアテマラ・ポアキルの土曜学級の子どもたちは5ページ

グアテマラ・ポアキルの土曜学級の子どもたち

- 02 グアテマラのアフリカ系住民 …………… 大西裕子訳
- 05 グアテマラ・ポアキル土曜学級の5年 ……………新川志保子
- 09 メキシコ・ナルコ回廊 ミチョアカン「熱い土地」 …山本昭代
- 13 ラ米百景「カストロを書き糾弾されたジャーナリスト」 …伊高浩昭
- 16 ペルー音楽「ルシーラ・カンポスとマヌエル・ドナイレ」 …水口良樹
- 15 メキシコの食「カボチャのラザニア」 ……ミゲル・アクーニャ
- 18 ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み ……………小林致広

ラテンアメリカのアフリカ系

以前この「そんりさ」でラテンアメリカのアフリカ系の人々について、その歴史と社会的背景を知るためのシリーズを掲載しました。今回からその続きとして、現在のアフリカ系（特にアフリカ系女性）の状況を紹介するシリーズをはじめます。

奴隷としてアフリカ大陸から連れてこられた人々は、19世紀末の奴隷解放の後も、そのほとんどはそれぞれの社会の中で疎外され、差別され、貧困状態におかれ、「見えない存在」であり続けています。

国連は「アフリカ系の人々が奴隷制度、奴隷貿易、植民地制度の被害者であり、今なおその影響の犠牲になっている」として、2011年の「アフリカ系の人々のための国際年」に続き、2015年から24年を「アフリカ系の人々のための国際の10年」として、状況の改善に向けての行動計画などを作っています。（以上国連連合広報センターHPより）

今回のシリーズで訳出するのは、Noticias

Aliadasインターネット版の特集「アフリカ系の人々：可視化、認識、権利」で、シリーズ第1回目はグアテマラです。さらに、ホンジュラス、ペルー、ニカラグア、メキシコ、ドミニカ共和国、コロンビアなどを順に紹介していきます。どうぞお楽しみに。（そんりさ編集部）

数字で見る

ラテンアメリカ・カリブ地域のアフリカ系

- ✓全地域で2億人、総人口の30%を占めている
 - ✓貧困 90%が貧困か極貧の生活をしている
 - ✓保健 出生児死亡率（1000人あたり） ブラジル 40.2%（非アフリカ系34%）、エクアドル 37.2%（同左33.3%）、ニカラグア 38%（同左27.3%）、コロンビア 31.7%（同左25.6%）
 - ✓平均余命 男性64.6歳（非アフリカ系70.3歳）女性66.7歳（同左77.5歳）
 - ✓失業率 女性14%（非アフリカ系10%）男性7%（同左5%）
 - ✓非識字率 30%
- （出典：米州機構Pew Reserch Center 2016）

グアテマラ

存在を認めさせるため闘うアフリカ系住民

根深い人種差別が続くグアテマラで、アフリカ系住民は自分たちは見えない存在であると感じている。

アフリカ系グアテマラ人で、新聞記者のジョアンナ・ウエザーボーンは転校先の学校に出席した16歳の時に、初めて人種差別を受ける経験をした。クラスの同級生たちからいじめを受けたのだ。

「誰にも話しかけてもらえず、すごくつらかった。

クラスの子たちは、私の姿を動物のように描いた絵を、廻していました」と彼女は思い起こす。

2年後、中学校を卒業し、サンカルロス国立大学に入学請願書を送った。

しかし、奨学金はマヤ先住民とガリフナ人の学生だけに適用されるため、彼女は受け取れないことがわかった。

1920年代に、米国のバナナ企業、ユナイテッド

フルーツ社で働くため、ベリーズとの南側国境近くのプエルトバリオス市に移住してきたジャマイカ系住民の子孫として、ウェザーボーンはアフリカ系グアテマラ人・クレオールのマイノリティ・グループに属している。ガリフナ民族ではない。

ガリフナ民族とは、西アフリカ、中央アフリカから連れてこられた奴隷の子孫と、カリブ先住民族や南米のアラワク民族との混血の人達のこと、中米のカリブ海沿岸地域で暮らしている。

「私は奨学金を得るためにガリフナ系として登録する(名乗る)ということをしたくなかったので、教育ローンを組んで大学に入学しました」と彼女は言う。大学時代、ウェザーボーンは、彼女の教授たちが何度も、彼女の知性と優秀さに驚いている、ということに気が付いた。「彼らは私の能力に驚きました。常に私をアフリカ系という偏見でしか捉えておらず、ダンスを踊ったり、ココナッツ料理を作っているものだと思っています。私たちの業績や、どのように経済的に貢献しているかについても話題にしません」

多くのグアテマラ人女性のように、ウェザーボーンも、通りで嫌がらせを受ける事が頻繁にあるが、黒人女性は特に残酷で暴力的に扱われることが多いという。「通りで、私に向かってどんな風にお前を強姦してやろうかと叫ぶのです。私の前に別の女性が通っても、彼女にはそんなことは言いません。女性なら誰でも嫌がらせを受けることはあります。でも、私以外の女性には、これほど下品で悪質なことは言わないのです。なぜなら、黒人女性は性的にすぐに熱くなり、簡単に扱えるという固定観念があるからです」と指摘する。

正確なデータの不足

グアテマラのアフリカ系の人々がマイノリティ・グループとして初めて公式に確認されたのは、グアテマラ政府と左翼ゲリラが1996年に和平協定を締結した時である。この内戦は36年間続き、20万人

以上が殺された。グアテマラの憲法に組み込まれた和平協定は、「グアテマラ国は多民族、多文化、多言語という特徴を持ち、和平協定の調印者は、マヤ、ガリフナ、シンカのアイデンティティと、政治的、経済的、社会的、そして文化的な権利を認め、尊重する」と謳っている。しかしながら、この公的に承認されたアフリカ系コミュニティの中には、ウェザーボーンのような、ガリフナ系でない黒人は、含まれていない。

アフリカ系住民の権利のためにグアテマラ政府が取り組んだ最初のステップの一つはイサバル県東部のリビングストン市とプエルトバリオス市の3つの学校で2014年から始まった、ガリフナ語とスペイン語の二言語教育の推進だった。この二つの市では、ほとんどの生徒がガリフナ人だった。

アフリカ系とガリフナ系についての専門家、ベネディサ・カンタエデ・ダ・シルバは、ガリフナ民族の他地域への移住、そして自分たち独自の言葉を話すとかにされるという恐れが、多くのガリフナ人の子どもに母語を捨ててしまったという事実を考えれば、この言語教育の取り組みは、ガリフナの文化を保持していく大切な一步になる、と考えている。しかしながら、アフリカ系住民についての信用できる国勢調査のデータが存在しないので、彼ら特有の問題に対応するための、幅広い公的政策を実施することは難しい。

2002年の人口調査に基づいた最新のアフリカ系住民の公的統計によると、グアテマラの黒人人口は5100人で、全人口の1%以下である。しかし、いくつかのガリフナ民族の組織による調査では、実際の数は一千万人を超え、20万人に迫る。

「人口調査は不可欠です。なぜなら存在が見えないということは公共政策がないことを意味するからです。『アフリカ系グアテマラ人』とは誰なのか、そして人口がどのくらいなのかを知らない限り、公共

政策は夢物語にすぎないでしょう」とカンタエド・ダ・シルバは指摘する。

人種差別

アフリカ系グアテマラ人のリーダー達は、問題の根本は、例えば、メディアを通して特徴づけられている黒人に対する差別的な描写によって、グアテマラ社会に深く根を張る人種差別にあるという。

2016年1月、右派の準軍事組織、国民集中戦線（F C N）から立候補した元コメディアン、ジミー・モラレスが大統領となったが、役者として彼が演じたものの中に、アフロヘアーのかつらをつけて顔を黒く塗った役があった。これは、ピタヤ・ネグロという、アフリカ系の人々を侮辱するためのステレオタイプの人物像である。

「このキャラクターはアフリカ系の人々をバカにし、くだらないギャグで人々の共有意識の中に入り込みます。グアテマラ人はアフリカ系の人々に対して嫌悪感を持っていて、彼らを、薄汚れて怠惰な黒人として扱っています。だから、そんなギャグを作るのです」と記号学者のラミロ・マクドナルドは述べている。

和平協定の実施に伴って、グアテマラ政府は人種差別の事例を調査し裁判に訴えるために、2002年、「先住民に対する人種主義と差別に対する大統領委員会」（C O D I S R A）を設立した。しかし、マヤ民族でなければ、その声はほとんどこの組織には届かない、とアフリカ系の人々は指摘している。

「C O D I S R Aは現存するすべての民族差別主義の状況を解決するには不十分です。多文化のグアテマラについて語る時、マヤ先住民の多様性については正当化されますが、他の民族について話すと、人々は迷惑がり、不快に思うのです。アフリカ系住民は先住民と似た状況にあるにもかかわらず、彼らの権利に対して開かれたスペースが余りにも小さいので、他のグループの権利について考えると、自分

たちの権利を取られてしまうように感じるのです」とウェザーボーンは言う。

「アフリカ系グアテマラ女性協会、アフロアメリカーナ21」のガリフナ民族のリーダー、グロリア・ヌニェス・デ・シルバは、政治参加がアフリカ系の人々の声を確実に聞いてもらう唯一の方法だと考えている。しかし、縁故主義（コネ）の習慣と、選挙活動に必要な莫大な資金が、ガリフナ系女性の立候補を妨げている。

アフリカ系のリーダー達は、オスカル・ベルシェ大統領（任期2004～2008）の政権で文化スポーツ省大臣だったマリオ・エリントン・ランベのように、黒人政治家は、たとえ閣僚に任命されても、財源もなく政治的にも重要でないポストしか与えられないと、何度も指摘している。

「私たちは自分たちの存在に気付いてもらうこと、そして、表面的な容姿ばかり見られるのではなく、能力そのものを見てほしくて闘っているのです。私たちの大きな挑戦のひとつは、政治に参加することです。しかし、ガリフナ系女性は汚職に手を染めないで、周辺に追いやられてしまいます。なぜなら、公職の地位はお金で買うものだからです。地域の首長候補者になるには50万ケツアル（6万5500ドル）かかるのですから」とヌニェスは語った。

http://www.noticiasaliadas.org/objetos/informe/38PE_Informe-Especial-Afros-NA.pdf" http://www.noticiasaliadas.org/objetos/informe/38PE_Informe-Especial-Afros-NA.pdfより

（大西裕子訳）

グアテマラ

ポアキルの土曜学級 5年間を振り返って

新川志保子

チマルテナンゴ県ポアキルでのグアダルーペ組合による子どもたちのための土曜学級が始まってから5年が過ぎました。以前クラウドファンディングをした時に、この「そんりさ」誌上でも土曜学級についてお知らせしました。のべ450人の子どもを受け入れたこの土曜学級の5年を振り返ってみようとおもいます。

土曜学級は、カトリック教会大阪市教区のシナピスこども基金より1年に100万円をいただけることになり、始まったものです。土曜学級を運営しているのはグアダルーペ組合です。グアダルーペ組合は、内戦中に軍に夫を殺された女性たちが生き延びるために助け合って作った組織です。30年ものあいだ活動を続けており、民芸品を作って売るなどメンバー女性たちの収入のための活動だけでなく、子どもの教育、内戦の記憶をとどめるための活動など、コミュニティに根ざした活動を地道に行っている組織です。現在も会員が200人以上います。

ポアキルはマヤ・カクチケルの人々が住む地域です。ほとんどの世帯が貧困層で、母語はカクチケル語、公用語のスペイン語を話さない人も多いのです。経済的な理由で学校に行けない子どもたちも大勢いますが、行けても授業がスペイン語で行われるためついていけない子どもも多いのです。そしてやはり多くの子どもが貧困のために慢性的な栄養不良です。

ポアキル町とパネヤ、パラマという村の3カ所を毎週土曜日にクラスを開き、それぞれに30人の子どもを受け入れること、そして給食も出すことを決めました。ポアキルは、グアダルーペ組合の事務所の一室を使い、パネヤとパラマは村の小学校の教室を借りて行うことになりました。



授業の風景

1クラスにつき2言語教育ができる教師を1人雇います。カリキュラムは、年度初めにアドバイザーと3人の教師、そしてグアダルーペ組合運営委員会が相談しながら作ります。身近にある教材なども取り入れて、子どもたちの好奇心を刺激し、楽しく学べるようにとの観点から、小学校1年から3年に教える内容で組み立てられます。そして各教師がそれにそって教材を選び授業を進めます。授業は母語のマヤ語と公用語のスペイン語の2言語で行われます。この地域のほとんどの子どもは、スペイン語はある程度理解できても話せないのです。なので、小学校に行き始めてまずぶつかる壁がこの言葉です。授業はほとんどがスペイン語で行われるためついていけない子どもが多いのです。その点、この土曜学級では母語で説明を聞き、スペイン語でどう表現するかを学ぶので、子どもたちがひとつひとつの事柄をきちんと理解できるようになります。理解できるとさらに好奇心を持ち、楽しく学ぶことができます。このように、子どもたちが確実に知識を身につけ、学力が向上してゆくのです。また、学校の授業の補習だけではなく、自分たちが住む村や地域の歴

史・文化について学ぶ機会も取り入れ、またリサイクルの重要性や健康に悪いものを食べないことなどについても学びます。

受け入れる子どもの年齢は5歳から11歳くらいまでで、貧困状況などニーズが大きい子どもを優先しています。

当初は、朝9時から夕方5時まででやる予定でしたが、実際に始めると、長すぎるのがわかり、また、夕方暗くなってから小さな子ども達を家に帰すのも好ましくないということから、朝8時から昼過ぎまでとなりました。最後に給食を食べてからクラスは解散となります。

子どもたちの年齢に幅があるため、どうしても理解度に差が出てしまいますが、それは年上の子が下の子に教えたり、手伝ったりして解決します。このような経験を通じて子どもたちは協力し合うことも覚えていきます。

アドバイザーは隣町の校長先生、フーリオさんで、定期的に3クラスを訪問し、カリキュラムが予定通り進行しているか、子どもたちが参加しているかを確認します。そして常に教師3人、グアダループ組合と連絡を取り、問題が起こった時など迅速に対処できるようにしています。

こうして土曜学級に通う子どもたちは着実に学び、それに伴って活発になり、学力も目に見えて上がっていきました。子どもたちがひとつひとつの事柄をきちんと理解できるようになります。そして学力が向上してゆくのです。小学校に2年通って初歩の九九ができなかった女の子が、土曜学級の日で九九を覚えた、という例もありました。ハサミなど工作道具を使って色々なものを作ったりすることにも力をいれているので、子どもたちの手先が器用になります。小学校に行っても、子どもたちは物怖じしなくなり、教師の質問にも積極的に答えるようになるなど、学校の先生方も、土曜学級の成果に目を見張っています。パラマでは、その貢献に対して校長から感謝状ももらいました。



待ち遠しい給食の列に並ぶ子どもたち

親の意識が変わったことも大きな成果でした。自分自身も基礎教育をほとんど受けておらず、教育の重要性を認識していなかった親たちも、子どもが積極的になり、知識をどんどん吸収しているのを見て、考えを変えてゆくのです。そして、子どもたちには自分たちより良い暮らしができる可能性を見出すのです。

また、それぞれのクラスの教師は地元の人なので、子ども一人ひとりの家庭や生活環境も把握しており、きめの細かい指導ができます。

毎週土曜日の授業で学ぶことはもちろん重要ですが、何といても子どもたちにとって楽しみなのは給食です。給食は栄養士に相談してバランスのとれたメニューを決めます。給食はお母さんたちが交代で作ります。グアダループ組合で3クラス分まとめて作り、それぞれのクラスの分を運びます。親にとって子どもがお腹がいっぱい、満ち足りた笑顔を見るのは何よりの喜びです。子どもたちの健康状態がよくなったと実感しているということです。

土曜学級では、子どもたちが協力しあうことも覚え、またゴミを出さない、資源を大切にする、マヤの文化というような価値観も培われます。子どもたちが学んだことは家庭やコミュニティの他の子どもたちとも共有され、大人も子どもの変化に目をみはっています。このように、土曜学級はコミュニティに根付いた素晴らしい存在になっています。

旱魃、物価高騰、クラウドファンディング

このようにクラス自体は非常にうまくいっていましたが、物価が毎年上がって、土曜学級のやりくりは大変でした。ほとんど毎年のように旱魃や大雨などの災害が起り、作物に被害がでるのです。

そして3年目が終わる頃に予算の危機が起りました。干ばつが3カ月近くも続き、農作物に大きな被害がでたのです。政府は「非常事態宣言」を出したほどです。当然物価も高騰し、鉛筆やボールペンなど倍以上になった文房具もありました。給食用のトウモロコシ、米、肉、野菜なども軒並み値上がりしています。しかも、円安のために日本からの送金額が目減りしてしまうことになり、100万円は前年の3分の2くらいにしかならないことがわかったのです。このままでは、翌年は子どもの数をかなり減らさなければならないことがわかりました。これまでどおり、3クラス90人の子どもを受け入れるためには、あと50万円ほど不足しています。なんとかしなければ、と急遽対策を考えた結果、インターネットで寄付を募るクラウドファンディングをすることになりました。とはいえ、インターネットに詳しいメンバーもおらず、手探りで始めなければなりません。そしてなんとか開始、土曜学級が始まる1月にやっと目標額の目処がたち、一同ほっと胸をなでおろしたことでした。

シナピス基金よりの支援は5年が限度ということで、最終年の2016年、さいわいにも、別の団体から子どもたちのためにと30万円の寄付がありました。これをシナピスよりの100万円に追加して、またグアダルペの自己資金も使ってもらい、レコムでは別途お金集めをしないでなんとか乗り切ってもらいました。

クラスが終わるのは10月末で、それぞれのクラスごとに修了式を行います。家族にも出席してもら



子どもたちとグアダルペ組合のメンバー

い、こどもたちは一人ひとり修了書、ディプロマをもらいます。娯楽が少ない農村部の暮らしでは、このようなメリハリのある行事もとても重要で、こどもたちにとって大きな励みになります。

このように、この5年で土曜学級は地域にしっかりと根付き、多くのこどもたちに学ぶ喜びを教えました。

支援している私たちにとっても、グアテマラの初等教育制度の問題や矛盾を知る機会となりました。小学校の教師の多くが質がよくないということがまず問題です。小学校の教師は、通常中学を終えた後師範学校に3年行き、教員免許が取れます。つまり日本でいうと高校卒業程度で教師になるということです。また、給料が安いので、午前中の授業が終われば午後は別の仕事をする人も多く、授業の準備などおざなりになることも多いとか。よほど熱心で頑張る先生でないと良い授業はできないということです。予算もないため、土曜学級のように一人ひとりの子どもがハサミなど工作道具を使って何かを作るということも少ないということです。小学校の運営も校長先生の裁量に任される部分が多く、どんな校長がいるかで明暗が分かれることも多いのです。例えばパネヤ村の土曜学級は、最初の1年は校長が好意的でなく教室を貸してもらえないこともありましたが、2年目には校長が代わってこの問題は解決しました。

グアダルーペ組合がこの土曜学級を成功させるために多くの努力をしたことにも目を見張りました。メンバーは40代後半から60代くらいまでのマヤ女性で、小学校を卒業した人はいません。スペイン語を話せる人はそれほど多くありません。土曜学級の運営も経験はありませんでした。そんな彼女たちが最初にしたのは、アドバイザーを探してよく話を聞き、まず自分たち自身がやり方を理解してから始めるということでした。教師を選ぶために、アドバイザーと共に面接を重ね、経験や人柄なども吟味しました。そして教師の給料、教材や給食のための食材など、予算を組み、開始したのです。前述したように、物価が上がってやりくりが大変になりましたが、きりつめるところはきりつめ、組合の資金なども投入しながらこの5年間頑張ったのには、本当に頭が下がります。

それももう終わりになる、という時に、このような素晴らしい活動を終わらせてしまうのはもったいない、なんとか継続させられないかと、関西の加古川教会のグループが支援をしてくれることになりました。これまでどおりの年間100万円は無理なので、できる範囲で支援してもらうことになり、規模は縮小しなければならぬものの、土曜学級を続けていくことができることになり、一同ほっとしたことでした。

そして昨年12月、このグループからの寄付金27万円が届きました。が、子ども30人のクラスを1年続けるには約50万円かかります。1クラス分だけでも集めようと、シナピス基金からも協力いただき、またレコムもMLや個別の呼びかけなどを行って50万円を目標に募金を行いました。皆様のご協力のおかげで、結局70万円ほど集めることができました。超過分をどうするかは、グアダルーペ組合と相談して、受け入れる子どもを増やすか、上がり続けている物価高に対応するための準備金とするか、来年のために残しておくかを決めてもらうことにしま



す。これについては次回の「そんりさ」でまた報告いたします。

サポーターを募集

ポアキルの土曜学級をこれからも継続していくためには、最低でも年間50万円が必要です。安定してこの金額を確保するために、毎年決まった額を支援してもらおう「土曜学級サポーター」を募ることにしました。詳細などについてはまた改めてお知らせいたします。

子どもの栄養不良と教育

ユニセフのグアテマラ事務所によると、グアテマラでは5歳以下の子どもの43.4%が慢性的な栄養不良（子どもの年齢に比べて身長がどのくらいはるかで測る）である。そのために、病気にかかりやすい、知能の低下、学校を続けられない、低い生産性などの兆候があり、生涯にわたってこれをひきずる。先住民の子どもでは、10人に8人が慢性的な栄養不良である。世界的な経済不況に加えて早魃などの気候変動の影響で先住民の暮らしは一層厳しくなっており、特に子どもがその影響を強く受けている。

小学校に入学する子どもの割合は近年上がってはいるが、卒業まで行くのは40%にすぎない。先住民の女の子は平均で小学校3年までしか行っていない。

メキシコ・ナルコ回廊をゆく 2016 その2

～ミチョアカン「熱い土地」へ 山本昭代

2016年8月末～9月中旬、メキシコ報告第2弾。

メキシコ北東部の街ケレタロからいったんメキシコシティに戻り、次に向かったのが、南西部にあるミチョアカン州。州都モレリアは、標高2000m弱、穏やかで過ごしやすい気候で、先スペイン期からの長い歴史を誇り、植民地時代の壮麗な建造物が建ち並ぶ旧市街は世界遺産に登録されている。

緑と水に恵まれたモレリアとその周辺の北部の高地地帯と対照的なのが、州南西部の低地、「ティエラ・カリエンテ（熱い土地）」と呼ばれる地方である。その中心地が、モレリアからバスで約4時間半のアパツィンガン。かつて州全土を支配した悪名高い麻薬組織「テンプル騎士団」カルテルが根城としていた街である。

アボカドとレモン

モレリアからバスで向かうと、美しい湖沼が点在するパツクアロ、そしてアボカド栽培で名高いウルアパンを抜ける。ちなみにミチョアカン州は世界的なアボカド生産地で、日本に輸入されているアボカドも、ほとんどすべてミチョアカン産である。「緑の黄金」と呼ばれる貴重な外貨の稼ぎ手だが、栽培地を拡大するために森林が違法に伐採するなどの問題も引き起こしている。アボカドの単一栽培は水を大量に消費し、環境負荷が高いのだという。かつて「テンプル騎士団」カルテルが猛威をふるっていた頃には、アボカドの樹1本ごとに「税金」がかけられ、多くの農家が苦境に陥った。

道路の両側に広がるアボカド農園が途切れ、溪谷地帯を過ぎると標高が下がり、一帯は見渡す限りのレモン畑に。レモン(日本でいうライム)は、メキシコ人にとっては毎日の食卓に欠かせない食材で、ミチョアカンのもうひとつの主要農産物だ。輸出が大部分を占めるアボカドと異なり、レモンはほとんどが国内市場向け。アボカド農園の収穫労働者がみな



④ウルアパンのアボカド農園。本来は高木になるアボカドだが、枝がたくさん出るよう、低く剪定されていた
⑤レモン集荷場の入り口で。早朝から家族総出で働いた人たちが日陰でくつろいでいた

成人なのに対して、「熱い土地」で見かけたレモンの収穫労働者は、近隣の州から一家で出稼ぎに来ている貧しい先住民たちだった。レモンの収穫はすべて手作業で、小学生くらいの子たちも親と一緒に働いている。輸出向けの農産物では児童労働は禁物だが、国内向けならおとがめなしというわけか。レモンの集荷場で見かけた一家に、「子どもの学校は？」とたずねたが、返事はあいまいだった。

「テンプル騎士団」の時代にはレモン農家にも、栽培面積や持っているトラックやスプリンクラーなどの数に応じて「税金」がかけられ、さらには貧しい収穫労働者から賃金の4分の1もピンはねし、価格操作のために働ける日を限定するなどあくどい仕打ちがされていた。労働者らが抗議のためにデモをすると、逆に逮捕され、殺害されたり行方不明になった

りした。当時は役所も警察もすべてカルテルの支配下にあり、暴力組織のやりたい放題だったのだ。

『カルテル・ランド』の街

アパツィンガンの街でバスを降りると、「熱い土地」の名のとおり、暑い！

年間の平均気温は27度、暑いときは40度になることも。東京の夏と比べれば、湿気がない分、過ごしやすいが、昼間に日向を歩くのはかなり辛い。アパツィンガンは人口約12万人の庶民的な商業の街。かつての犯罪都市は警察と軍が重点的に警備にあたっているため、治安は保たれていると新聞は報じていた。警察のピックアップトラックの荷台に警官が立ち乗りし、鋭い目つきで見回しながら中心街の道路を巡回していた。だがあとで人に聞くと、この街では今も毎日2、3人は殺されて黒ビニール袋に入れられたのが見つかっている。商店街の店もしょっちゅうとっていいほど強盗に遭っているとか…。

この「熱い土地」を訪れたのは、2016年5月に公開されたドキュメンタリー映画『カルテル・ランド』の舞台となった街に行き、元自警団の人たちの話を聞いてみたかったから。映画は、テンプルの横暴に耐えかね、軍も警察もあてにできないことに業を煮やした市民が、2013年2月、リーダーのミレレス医師のもと、自ら武器を手に自警団を立ち上げたところから始まる。2015年には麻薬組織を追い出すことに成功し、自警団は合法化される。しかし実際

には自警団には犯罪組織の人間が加わっており、制服を着ながら覚せい剤を密造するショッキングなシーンも写し出されていた。

自警団が最初に結成された街のひとつで、ドキュメンタリーの舞台となったテパルカテペク行政区の元自警団メンバーとコンタクトが取れた。暑い土地の北部でハリスコ州との境に近いテパルカテペクの街は、アパツィンガンからバスで約2時間。途中、2か所で警察の検問があった。いまだに「熱い土地」は緊張状態にあるのだ。

バス停に迎えに来てくれたのは、姉御肌のフアニータ。農業技師で、自警団の立ち上げのときから参加しており、かつては銃を肩に見回りもしていたという。彼女のワゴン車で警察署に連れて行ってもらい、話を聞いた。この街の警察署では、信頼できる地元の人しか採用せず、署長も外からは入れず、地元出身の元自警団リーダーが就任している。いままの街の住民の多くが無線ラジオを持ち、何か異変があればすぐに知らせ合い、万々に備えている。周辺の街や村では武装組織同士の抗争が続き、銃撃戦や殺人などがしばしば起きているが、おかげでここでは平穏が保たれているという。

ちなみにこの地方では、開拓者精神がいまも息づき、狩猟が趣味という人が多い。女性でも銃が使える人は少なくない。彼女も小さいときから親から習っていたという。そのような風土が、市民による武装蜂起の背景にあったようだ。

「悪者か、英雄か？」

フアニータは自警団蜂起の前、タコスの屋台を出したばかりだった。店開きをして2週間後、テンプルの男が来て、タコスの売り上げ1つにつき1ペソを支払えとってきた。1つ5ペソだったタコスを6ペソに値上げしなければならなくなった。売り上げは落ち、結局店じまいせざるを得なかった。集金係は地元出身の若者だったが、組織犯罪というだけあってよく組織化され、決まった額の上納金を支払わされていたようだ。地元では進学率が低く、定職に



アパツィンガンの巨大な大聖堂

就けない若者が組織からいい金になるからと誘われていた。しかし実際は約束の給料は払われず、脅かされ、ドラッグ中毒にされ、家に戻りたくても戻れず、多くが殺されたり行方知れずになったりした。

警察も組織の支配下にあったが、自警団蜂起の際には組織メンバーは追放し、追隨していただだけの警察官に対しては、組織に残るか自警団に入るか、「悪者か、英雄か？」と詰問し、「英雄になる」と答えたものを味方に入れた。

同じ家族のなかでも、兄弟のひとりには組織に入り、ほかのものは関係ないなどと分裂していたところもあった。じつは当時の行政区長は彼女のいところだったが、テンプレの資金で当選し、犯罪組織に街を売り渡してしまっていた。自警団蜂起後、区長は逃亡し、彼女はいとこと決別し、付き合いも絶ってしまったという。

高校教師のベアトリスが自警団に加わったのは、教え子だった若者が給料日に金を取り立てに来ようになったからだった。彼女は学校の仕事以外に家畜を飼い、農場に灌漑設備も持っていたので、ほかの教師より高い金を要求されていた。組織からの呼び出しに応じなかったら、かつての教え子が来てピストルを突き付けて脅されたという。

ミレス医師とともに従軍医師(?)として働いたアルバレス医師は、別名「ドクター白十字」。テンプレ騎士団が赤い十字をシンボルにしていたので、その逆のあだ名がついたのだという。当時はいつも防弾チョッキを着て診察に当たっていた。いまでも自分のピストルを持ち歩いている、と見せてくれた。



テパルカテペク警察署前で。左が「ドクター白十字」ことアルバレス医師

武器や装備の出所が気になるころだったが、アルバレス医師のように余裕のある人が防弾チョッキなどを多く買い、ない人に貸したりしていたという。噂されていたようなテンプレのライバル組織「ハリスコ新世代」などからの支援は一切なかった、と断言した。

ドキュメンタリー映画の話になると皆一様に顔をしかめ、口々に「あれは嘘ばかり。ひどい」といい、「8割ウソ」とまでいう人もいた。自警団がみな、盗みを働いたり、覚せい剤を密造したりしているような印象を与えている、というのだ。自分たちは実直な一般市民で、そのようなことは一切なかったし、互いに助け合い、必死に自分たちの街を守ったにもかかわらず、貶められたような気持ちになったという。またミレス医師を自警団創設者のように描いているが、実際に委員会に入ったのは立ち上げから3か月後である。ミレスは口先でたただけだったが、自分たちは武器を取ってたたかった、女性関係で信頼を失った、といった批判的な声もあった。

もうひとりの立役者

自警団蜂起のもうひとりの重要な立役者だったが、レモン農園主のイポリト・モラ氏である。アパツインガンとテパルカテペクの間にあるブエナビスタ行政区ラ・ルアナ村に、ドン・イポリトを訪ねた。犯罪組織に理不尽な金を請求されることに業を煮やし、テパルカテペクの友人たちと話し合



自警団運動のもうひとりの立役者、イポリト・モラ氏

い、2013年2月の同じ日に自ら自警団を率いてこの村で決起した。『カルテル・ランド』の監督から取材の申し入れがあったが、出演は断ったという。自

警団運動が終息してのちは下院議員に立候補したが落選。それでも地域のオピニオンリーダーとして、テレビや新聞の取材を頻繁に受けている。

ブエナビスタには、もうひとり、別の自警団を率いる「エル・アメリカーノ」ことルイス・アントニオ・トレスという男がいる。ハリスコ新世代カルテルとつながるマフィアだが、ドン・イポリトとは方針の違いだけでなく個人的な理由からも対立し、2014年12月には自警団同士の銃撃戦となり、11人の死者が出、ドン・イポリトの長男もこのとき命を落としている。

ラ・ルアナ周辺は依然として暴力がやまず、月に2回くらいのペースで殺人や行方不明事件が起きているという。取材の前日にも、近所の若者が自宅から無理やり車に押し込められ拉致されていった。理由はわかっていない。ドン・イポリトも常に命を狙われている身なので、政府が派遣した4人のボディーガードが24時間警護にあたっている。

「この国では、人殺しをしても2万ペソ(当時約12万円)も払えば外に出られてしまう。汚職がなくなるよう、法律を変えて刑罰を厳しくしなくちゃいけない。訴えを聞き入れられるまで、市民は訴え続けなければ」

しかし、現実はその容易には変えられそうにない。同じ日、なんだか警察や軍の車両が忙しく走っていると思っていたら、アパツィンガン近郊で犯罪組織を追跡していた司法警察のヘリコプターが地上から狙撃され、墜落してパイロットと警察官ら4人が亡くなったというニュースが(唯一生き残った警察官1人も数日後に死亡)。政府をも圧倒する、恐るべき麻薬組織の軍事力！ 翌日の新聞にはさぞ大きな記事に、と見てみたが…。一面はその1週間以上も前に亡くなったメキシコの歌手ファン・ガブリエルの遺灰がどうのこうのというニュース。ヘリ撃墜の記事は3面に控えめに入っているだけ。いったい誰が、何に遠慮をしているのか？ それともニュースバリューがないということか？

ラ・ルアナ村に続く道路脇にはあちこちに十字架が。後ろに広がるのはレモン畑



ミチョアカン州では、テンプル騎士団という大カルテルに対抗するために、市民による自警団、テンプルから寝返った元マフィア、敵対カルテル、そして政府の軍・警察が連携して勝利した。その結果、2015年には殺人件数は前年より25%ほど下がったとされる。それでも、メキシコ国内で4番目に殺人件数が多い州である。いままテンプルの残党をはじめ10あまりの中小の武装犯罪グループが乱立し、互いに縄張り争いを繰り返し、さらに北のハリスコ州に勢力を持つハリスコ新世代カルテルが触手を伸ばしている。

9月下旬、私が帰国した後に、ミチョアカン州一帯にカルテルのリーダー名で「戒厳令」がSNSを通じて出された。市民は夜間に歩かないように、自分たちの「敵」と混同して攻撃してしまうかもしれないから、というのである。12月25日、クリスマスの日にも6個の切断された頭部が発見された。12月はこれで8個目だった。市民にとっては、恐れていたものが再び始まってしまった、という思いだろう。

連載第61回 『ラ米百景』

伊高浩昭(ジャーナリスト)

フィデル・カストロを書いて 糾弾されたジャーナリスト

フランス在住の著名なスペイン人ジャーナリスト、イグナシオ・ラモネ(73)は進歩主義者で「より良いもう一つの世界」を目指す知識人。代表作に『フィデル・カストロ みずから語る革命家人生』(伊高浩昭訳、2011年、岩波書店。原題「フィデルとの百時間 二人の声で綴る伝記」2006年)がある。ラモネはフィデル・カストロ前キューバ国家評議会議長が2016年11月25日、90歳で死去した後、同書刊行によって引き起こされたメディアによる記事掲載拒否などについて、「ポスト真実期におけるメディア独裁」と題して真相を明らかにした。「ポスト真実」とは、同年11月8日の米大統領選挙でドナルド・トランプ共和党候補が勝利した後、急速に広がった概念で、「従来の真実が通用しない時代」を意味する。私は、問題の本の記者であり、翻訳前に東京でラモネに会っている。ラモネの真相告白は極めて重要な問題提起をしており、日本の言論状況とも無関係ではなく、ここに要旨を紹介する。

▼問答無用のスペイン紙

フィデル・カストロの死を契機に大手メディアは誹謗報道を展開した。私(ラモネ)はそれに心を痛めている。私がフィデルを良く知っていたことは周知の事実だ。私は個人的に証言しようと決意した。確固たる知識人は不公正を批判せねばならない。まずキューバの不公正から始めよう。メディアの画一性が多様性を潰し、異論を検閲し、反体制派執筆者を罰すれば、弾圧と指弾されるのは当然のことだろう。

表現の自由を奪い異論を禁じる制度をどう形容すべきか。議論の多い矛盾を何であれ受け入れない制度とか、定められた〈政府の真実〉への違反に不寛容な制度とか。そのような体制には専横とか独裁という名称があり、これには議論の余地はない。私もスペインとフランスの不寛容な状況下で苦しんだ。それを語りたい。

私への誹謗は2006年にスペインで『フィデルとの100時間』を刊行した時に始まった。この本はキューバ革命の指導者フィデルと何百時間も話し合い、5年に亘った文書化の仕事の成果だった。私は攻撃された。それまで定期的に論説面に記事を書いていたマドリードの「エル・パイース」紙は説明無しに私を制裁、私の記事を載せなくなった。それだけでなくスターリン主義者宜しく、私の名は紙面から消された。私の著書の書評が掲載されることも、私の知的活動が報じられることも無くなった。何年も前から私が週1回コラムを書いていた「ガリシアの声」紙も同じだ。フィデルに関する本が原因で、説明無しに私のコラム掲載を止めたのだ。以来、私の活動に言及することは一切なくなった。

▼パリ大学講座も打ち切り

イデオロギー的独裁がやるように、知識人を象徴的に葬る最良の方法はメディア空間を奪い去ることだ。ヒトラーもフランコもやった。前記両紙は私に対してやった。フランスでもいろいろあった。フィデル本仏語版を2007年に刊行した出版社でも私は抑圧された。公共放送「フランス文化」では毎土曜朝、国際政治の番組を持っていたが、フィデル本出版後、主要メディアが私を攻撃し始めるや、「専横者の友人であるあなたが放送で意見を述べ続けるこ

とはできない」と私は言い渡された。スタジオの扉は私に対し永遠に閉ざされた。画一的な反キューバの合唱の中で異論を発していた私の声が封じられたのだ。

パリ第7大学で私は35年間、視聴覚伝達について教えていた。フィデル本に関しメディアの私に対する糾弾が始まると、ある同僚が「気をつけろ。〈独裁者の友人が我々の学部で教鞭を執るのには耐えられない〉と言いつら連中がいる」と忠告してくれた。やがて反フィデルを宣伝し私を大学から追放するよう呼び掛けるピラがばらまかれた。間もなく大学側から私との契約は更新されないとの通達があった。表現の自由の名によって、私の表現の権利が否定されたのだ。

当時の私は月刊「ルモンド・ディプロマティック」の編集主幹だった。経営母体は「ル・モンド」紙と同じで、私は過去の経緯から同紙の編集者協会に属していた。協会は編集主幹を職業的義務感の有無で判断し協会員の中から選んでいた。フィデル本刊行の数日後「リベラシオン」を含む主要メディアが私を攻撃し始めると、編集者協会長が私を呼び、「ル・モンドグループのジャーナリストは独裁者にインタビューしてはならない」と言った。私は記憶を辿って、何十年にも亘ってル・モンドが発言を寛容にも伝えてきたアフリカなどの真の独裁者の名前を並べた。だが協会長は「協会は君に出席してもらい説明を求めている」と続けた。「私を裁きたいのか。モスクワ式にか。イデオロギー逸脱による粛清か。異端尋問か、政治警察の役割を演じるのか。君らの法廷に私を無理遣り連行して」。こう反撃すると、彼らは説明を求めなくなった。

▼寛容無視のメディア独裁

私は、ナチズム、スターリン主義、フランコ期に多くのジャーナリストや知識人が遭ったようには拘禁も拷問も銃殺もされなかった。だが象徴的に報復され、スペイン両紙からもル・モンド紙のコラムからも消された。同紙は私刑を加えるためにだけ私に言

及した。

私は唯一の例ではない。フランスでもスペインでも他の欧州諸国でも、多くのジャーナリストや知識人が主要メディアの横暴な合唱と考えを異にするため、義務化された反カストロ教義を拒否するが故に沈黙を強いられ、見えなくされ、疎外されてきた。ノーム・チョムスキーは〈魔女狩り〉の国・米国の大手メディアから放逐され、何十年にも亘って主要紙コラムにも電波にも接近できなくなった。こうしたことが今、我々の〈メディア民主主義〉の下で起きている。それに私は今も苛まれている。ジャーナリズムの仕事をしたが故に、フィデルの言葉を伝えたために。主要メディアは裁き糾弾するばかりで、キューバ指導者の見解をなぜ伝えないのか。

寛容は民主の基盤ではなかったのか。ヴォルテール(1694~1778)は寛容について「あなたの主張に私は絶対に同意しないが、あなたが自身を表現する権利を持てるよう終生闘う」という言葉で定義した。「ポスト真実期」のメディア独裁は、寛容という本質的原則を完全に無視している。

ルシーラ・カンポスとマヌエル・ドナイレ

2016年12月12日、アフロペルーを代表する歌手、ルシーラ・カンポスが亡くなった。78歳だった。そして2016年の年末から翌17年の1月初頭にかけて、これまたアフロペルーを代表する歌手マヌエル・ドナイレが初来日し日本ツアーをすることが急遽決まった。そんなわけで、今日はこの二人の素晴らしい歌手について少し語ってみたいと思う。

ルシーラ・カンポスは1938年にリマで生まれた。父はカニエテのアフロコミュニティの出身で、リマではすでに失われていたアフロ文化をまだ受け継いでいた。そんなわけで、ルシーラは幼いころからアフロ文化の薫陶を受けて育った。

そんな彼女が音楽デビューしたのはアフロペルー音楽復興運動の中心人物であったニコメデス・サンタ・クルスによるヘンテ・モレナというアルバムへの参加であったとされる。このヘンテ・モレナはリマのバリオ(下町)に残るアフロ文化と、ハラナなフィエスタの情景をテーマとした1957年の名盤である。とはいえ、このアルバムではメインを歌うことはなかった。そしてニコメデス・サンタ・クルスが次に立ち上げたエポックメイキングなクマナナ座でルシーラで徐々に頭角をあらわしてきたようだ。この一座の有名な演目の一つとなった「洗濯女たち」の中にソロ歌手として活躍していた写真が残っている。1967年には彼女はニコメデスの姉ビクトリア・サンタ・クルスのペルー黒人演劇&舞踊団のメンバーとして活躍もしていた。

そんな彼女が歌手として一躍有名になったのは、アフロペルー音楽史に残る伝説のバンド「ペルー・ネグロ」の歌手としてであった。1969年結成直後のペルー・ネグロは、アルゼンチンで開催された「踊りと歌のイパノアメリカ・フェスティバル」で優勝することとなった。その中でルシーラは「ポブレ・ネグリート」を力強く芯のある通る声で歌っ



た。その素晴らしい歌が優勝に大きく貢献したということでも彼女が一気に注目をあつめることとなったのだ。

このペルー・ネグロという楽団は、まさに一般大衆に向けて強烈にアフロペルー音楽をプッシュし、それをヒットさせた時代の風雲児であった。この頃作られたペルー・ネグロの曲の多くが今のアフロペルー音楽のスタンダード・ナンバーになっていることからそのインパクトの大きさがよく分かる。

ルシーラ・カンポスは70年代半ばより徐々にソロ活動へとスイッチしていく。そして80年代には、その最初期からアフロペルー音楽を支えてきたギタリスト、オスカル・アビレスとの共演でフェステホやバルスの素晴らしい録音を残している。「マヨラール」「グアランギート」といったフェステホに「オブセション」などのバルスは色褪せることなき名録音である。

この頃の彼女の歌声は、ものすごい圧力で踊りへと誘う力を持っていて、まさにハラナの申し子と言いたくなる。バルスとフェステホを往還するメドレーを初めて聴いた時はものすごい衝撃だった(これはまたバックもすごいんですが)。この頃の録音は、サンボ・カベロとルシーラ・カンポス、オス

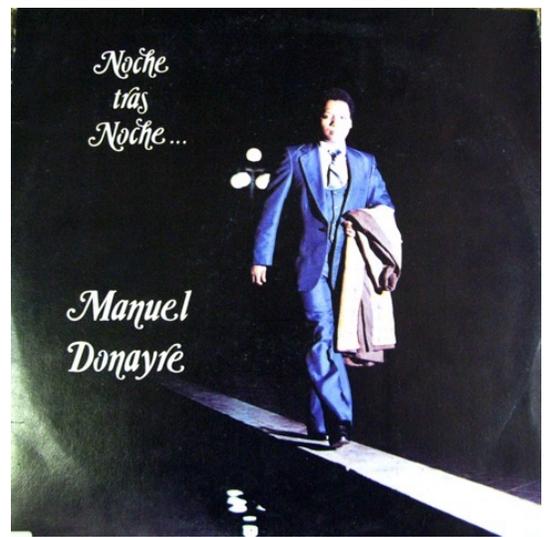
カル・アビレスの3人の連名でいくつも出ているので見つけたらぜひ聴いてみてほしい。

そんな彼女であったが、2000年代に入った頃には糖尿病とのたたかいが本格化しており、2007年にはペースメーカーを入れる大手術を行い、2009年にはついに足を切断している。アフロペルーの音楽家の多くは、この糖尿病とのたたかいが晩年長く続く者が多い。おそらく彼らの伝統的な食生活も大きく影響しているのであろう。ペペ・バスケスが糖尿病で足を切断することになった時にも、先に切断していたルシーラが彼に励ましの言葉をかけていた光景がニュースで流れていた。衰弱した彼らが互いに励まし合っている姿を見るのは辛かった。今でも私の中には、来日時のライブで体験したルシーラのあの声のド迫力が私の胸に強く刻み込まれている。

さて、年末から急遽来日が決まったマヌエル・ドナイレについても紹介しよう。「ペルーの黒いダイヤモンド」という異名を持つ彼は、ムシカ・クリオーヤを中心にアフロペルーも歌うアフロ系歌手だ。

彼もルシーラの父同様カニエテに1948年に生まれた歌手だ。先にリマに出てきていたオバのメルセデス・トラスラビーニャが歌手としてニコメデス・サンタ・クルスのクマナナに参加しており、その縁もあって9歳の頃にリマへと上京した。歌のうまかったマヌエル少年は上京直後にメルセデスに連れられてラジオ局で乞われるままにバルスからバラードから様々な曲を歌ったと言われている。

彼はムシカ・クリオーヤが非常に盛んなリマのバリオ、バリオス・アルトス地区に住むことになり、その素晴らしい音楽環境の中でその感性を育てていった。そんな彼が大きな影響を受けたのは、当時大人気であった歌手、ルチャ・レジェスであった。非常に貧しい中から歌によって当時随一の人気歌手へと上り詰めたルチャと親しくなったマヌエルは、彼女から多くのことを学んだと語っている。



そうして76年にマヌエルはついにレコードデビューを果たす。彼のハスキーでソウルフルな歌声は、一気にリマの人々の心を虜にした。その歌声はこれまでのムシカ・クリオーヤにはなかった新たな歌声であった。彼は連日ラジオやテレビで引っ張りだことなり、ペーニャなどでもすごい人気となった。「ヨ・ペルディ・エル・コラソン」「ヌエストロ・セクレト」「ムニェカ・ロタ」といったバルスや、カイトロ・ソトがカホンで参加したランドー「ヨ・ノ・ソイ・ハキ」などが代表曲だ。

80年代後半以降、ペルーはセンデロ・ルミノソのテロ活動とアラン・ガルシアの経済政策の失敗によるハイパーインフレによって一気に荒廃した。多くのペルー人が国外脱出を試みる中、マヌエル・ドナイレも1992年にアメリカに本拠を移すこととなる。以来彼は長らくペルーへと帰国することなくアメリカを中心に活動していくこととなった。

彼の歌のインパクトは、ともかくその歌声にある。非常にハスキーで中性的な響きを持っていると言ってもいいだろうか。非常に力強く歌い上げるが、叫んでいるわけではない。とにかく一度聞いたら忘れない、そんな歌声である。そんな彼を日本へと呼ぶことは在日ペルー人にとって一つの夢であった。この記事が出る頃には日本ツアーは終了しているだろう。今は私も一人のファンとして彼のステージを心待ちにしている。

ミゲル先生のメキシコ食巡り カボチャとチーズのラザニア

Lasaña de Calabaza con Queso

みなさんこんにちは。2017年最初のレシピはカボチャを使った料理です。

メキシコでのカボチャの存在感は、トウモロコシやチョコレート、トマトに似ています。数千年前から栽培され、もっとも古いものは1万年前にもさかのぼります。

カボチャを含む粘土層や石、木製品、農耕遺跡が各地で発見されており、それらは、8000年から4000年前というはるか昔のものです。北中米で最古の文明とされるオルメカの人々は、カボチャを火で焼いて食べていました。やわらかくて甘い味です。

ユカタン半島のマヤ人は数千年前から、赤砂糖（黒砂糖）で味つけた「蜜カボチャ」やカボチャの花のスープなどの料理をつくっています。

世界で現在栽培されている多くのカボチャの原産地はメキシコです。カボチャは今や全世界で栽培され、それぞれの地域の土や気温、大気などの条件に適応しています。



でもメキシコには、日本のスーパーに売っている種類のカボチャだけでなく、実にさまざまな特徴を持った品種があります。たとえばユカタンには、メキシコの他の地域にもない、甘くてやわらかくて、生で食べられるものもあります。

私が子どものころ、家では数え切れないほどのカボチャ料理やデザートをつくっていました。もちろん種子や花も、スープやデザートに活用していました。

■材料 4人分

- ・中型のカボチャ1個か、大きなカボチャ半分
- ・ピザ用のチーズ 75グラム
- ・豚挽肉100グラム
- ・タマネギ中 1/2 細切りにしておく。
- ・塩
- ・水1/2カップ

■作り方

1. カボチャの種を取り除いて洗い、3センチほどに切つて、やわらかくなるまで下ゆでする。その後、ボールに入れて、スプーンかフォークでつぶす。
2. タマネギを細切りにする。
3. フライパンに挽肉を入れて、中火で3分間ほどよく混ぜながら火を通す。
4. タマネギと水、塩を加えてよく混ぜる。水がなくなったら火を止める。
5. 下ゆでしてつぶしたカボチャと挽肉を混ぜる。
6. カボチャと挽肉を混ぜたものを4つの耐熱容器（透明なガラス容器か磁器）に入れる。チーズを上に乗せてから、オーブンに入れ、チーズが溶けたらできあがり。

ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み (2016年12月)

(1)チリ産サーモンの安全性論争

2016年5月上旬チリ南部海岸に魚介類の屍骸が大量に打ち上げられた。エルニーニョによる赤潮大量発生が原因とされるが、地元漁業関係者は3月に死んだ養殖サケの海洋投棄が原因と、当局や企業の対応を批判した(National Geographic日本版5月23日)。大量死のあったロス・リオス州とアイセン州にまたがるチロエ群島海域には養殖場が集中し、漁業関係者は海面サケ養殖の拡大が赤潮発生を加速させたと指摘する。

チリ・アイセン州在住の菊池氏は、ハフィントンポスト日本版(5月27日)に「日本で売られているチリ産の鮭を地元の人が食べない理由」という記事を投稿した。投稿はチリ南部の海面サーモン養殖の問題点を指摘したものだ。これに対して、自称水産商社員が「地元の人も食べ、安全である」と反論し、3カ月間、記事の本来の主旨とかけ外れた「チリ産サーモンの安全性」論争が展開することになる。

チリに生息しない北半球原産のサケ類を沿岸零細漁民の新たな漁業資源としようとする1970年代の日本JICAの養殖放流事業は失敗に終わった。1980年代初頭に日魯漁業の海面サケ養殖が成功すると、1980年代半ばから本場ノルウェー企業も本格参入し、現在ではチリは世界第2の養殖サケ類の輸出国になっている。

チリ南部の海面サケ養殖は多くの問題を内包する。海ジラミ駆除の殺虫剤やノルウェーから侵入したウィルス対策用抗生物質が多量に投与されている。後者はサケ1t当たり1gというノルウェー基準を大幅に超えた660gに達する。8月上旬、養殖業界は抗生物質大量使用を制限するプログラム開始を表明した(AFP、8月7日)。自然環境および生物多様性への悪影響への軽減するため、飼料、廃棄物、薬品などの適切な管理が直ちに行われるとは考えられない。

飼料残滓による深刻な海水汚染によって地元漁民の生活基盤は脅かされている。チロエ島一帯に居住する先住民族マプーチェは、領域に対する脅威として、海面だけでなく河川や湖沼も孵化・幼魚養殖場として囲い込むサケ養殖事業の拡張を挙げている。

*「サーモン養殖の裏側に迫る」(GreentvJapan、2012年、<https://youtu.be/ulaNxxZVUdQ>)

*Salmonopoly: fiebre del salm(Wilfried Huismann、2010年、<https://youtu.be/IE7t5bb4jNo>)

(2)チャムーラ行政区首長ら役所前広場で殺害

2016年7月23日、メキシコ南部チアパス州のチャムーラ行政区首長ドミンゴ・ロペスら5名が役所前広場で惨殺される事件が起きた。直接の引き金は、生産奨励金を求める住民2千名を解散させようと首長側が役所バルコニーから発砲したことである。しかし、反対派の反撃によって、役職者たちは広場に引きずり出され、AK47などで銃撃された後、「止めの一撃」を受ける形で殺害された。拘束された前行政区長ら7名が、実際の首謀者や実行犯であるかは不明である。

清水透さんの『コーラを聖なる水に変えた人々』(現代企画室、1984)の舞台チャムーラは、伝統的カトリック信者(司教区カトリックとは異なる)で制度的革命党(PRI)支持者だけが行政・宗教的権威者になれるという制度的革命的先住民共同体の代表例である。1970—80年代には2万人を越す新教徒や司教区カトリック信者が行政区から追放させられた。しかし、1994年サパティスタ武装蜂起、1995年の追放新教徒の帰村などで、伝統的支配体制は徐々に浸食されていった。

21世紀、チアパス州では3期連続で政党連合の知事が就任し、伝統的カシケが依拠してきた利権分配構造に大きな変化が起きた。PRI派首長も連邦・州の権力システムに取り込まれていく。殺害されたドミンゴ・ロペスは、2008—10年のPRI派首長だった。民主革命党と国民行動党連合の支持でチャムーラ地区下院議員に当選するが、PRI派の異議申し立てで当選は取り消された。しかし、2015年7月の選挙で、州知事の政党「緑の党(PVEM)」候補になったドミンゴ・ロペスは、PRI派候補をダブルスコアで破り首長に返り咲く。綽名のツェトホル(首切り人)どおり、彼は86年間続いたチャムーラのPRI支配体制の首切り人になった。

しかし、宗教・行政的権威者の再選禁止という「慣わしと慣習」を侵犯し、1990年代に追放された新教徒を重要な役職に登用し、行政区予算・援助金はPVEM支持者に重点的に流された。PRI至上主義の伝統的カシケの反発を買った首切り人は首を切られ

てしまった。10月、「慣わしと慣習」に基づいて、148共同体の代表約800名によって行政区議会が選出され、PVEM派の人物が新行政区首長に就任した。州選挙法では政党候補クォーター制だが、チャムーラの「慣わしと慣習」では行政区議会選出に女性の参加は禁止されている。

(3)内戦終結後のコロンビアの土地問題

半世紀に及ぶコロンビア内戦の背景に土地問題があることは和平協議の第1議題が「農村統合開発」であることから推察できる。和平合意後のコロンビア再建において、土地問題への適切な対応、統合的農村開発計画策定は不可欠である。2016年4月にアップされた動画「土地問題(el chicharrón de la tierra)」(<https://youtu.be/PDZRvaqAOTU>)は、コロンビアが直面する土地と農村の問題を要領よく説明している。

45年ぶりに実施された2014年農牧業センサスによると、調査対象の農村部の土地(11,300万ha)のうち農牧用地は4,230万haとなっている。牛2,400万頭分の放草地が3,380万ha、コーヒーやサトウキビ、油椰子など輸出農作物を生産する農園が710万haとなっている。一方、小規模農民約500万人が所有する140万haで国内の基本食料の43%が生産されている。

コロンビアの年間食品輸入量は1千万トンに達し、食料自給率は50%程度である。穀類99%、トウモロコシ80%、米50%、フリホール豆50%超は、輸入に依存している。たとえば国民食「バンデハ・パイ

サ」=写真=の食材で自給可能なのはチチャロン、アボカド、チョリソだけである。米(米国、フィリピン、エクアドル)、トウモロコシ



(米国、カナダ、アルゼンチン)、フリホール(カナダ)、バナナ(エクアドル)、牛肉(米国、アルゼンチン)、卵(ドイツ)は輸入に依存している。

コロンビアの農地の大部分は、国民の基本食料の生産ではなく、食肉や嗜好品、バイオ燃料など輸出農作物生産に向けられ、農地の46%は人口の0.4%が専有している。輸出農作物で得た外貨で不足する基本食糧を購入し続けるのか、食料生産という点で完全に機能不全状態にある農地を小規模農民による多

様な農作物生産の場として活用するように編成するのか、国造りにとって重要な選択が迫られている。

(4)ゴールドマン賞受賞先住民女性の活動記録

A:ラゲーナの娘(Hija de la laguna)

エルネスト・カバジェロ,2015年,<http://hijadelalaguna.pe>
法律を学ぶ先住民女性ネリダ・アヤイの目を通して、ペルー・カハマルカ県のコンガ鉱山開発計画に反対する環境保護運動を記録したものである。彼女は、2016年のゴールドマン賞受賞者マクシマ・アクーニャとともに、地域の生活水源であるラゲーナ群を残土・汚水処理場に転用しようとする開発に抵抗して



きた。ゴールドマン賞受賞後も、ラゲーナ・アスルに隣接する耕地を守り続けるマクシマ・アクーニャと家族は、鉱山開発企業側による耕地への接近妨害などの嫌がらせを受け続け、絶えざる身体の危険に曝されている。

B:川の女管理人(Guardiana de los rios)

Radio Progreso,2016年,<http://youtu.be/Lwwe4MOGfmo>

2015年のゴールドマン賞受賞者であるホンジュラスの先住民女性ベルタ・カセレスは今年3月に自宅で殺害された。その後も、彼女の属していたホンジュラス先住民民族審議会(COPINH)メンバー2名が殺害されている。2009年のセラヤ政権に対するクーデター後のホンジュラスでは、2010-2015年に人権・環境保護運動の活動家109名が殺害されている。アグア・サルカ水力発電計画による河川破壊に反対する運動の一翼を担ってきた



COPINH指導者たちもダム建設推進勢力が作成した暗殺リストに載せられているという。「川の女管理人」は家族や関係者の証言とともにベルタの活動を記録した5部作品の総集編である。

今年最初の「そんりさ」をお届けします。昨年は世界の情勢が混迷を増すなか、グアテマラでは戦時下性暴力裁判の勝訴など私たちに希望をあたえてくれるニュースもありました。

レコムは今年もグアテマラ支援を中心に、ラテンアメリカでよりよい社会を築こうと努力している草の根の人々・グループと連帯・支援の活動を続けます。

「そんりさ」では、これまでのニュースクリップに代わって今号から小林ムネヒロさんによる「ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み」が始まりました。マスメディアに載らないラテンアメリカのニュースをビビッドにお伝えしていきます。

また、レコムは今年創立25周年を迎えます。この25年のラテンアメリカとレコムの活動を振り返る特集なども企画しています。もちろん、ラテンアメリカの状況を伝える記事もさらに充実させていこうと思っておりますので、どうぞお楽しみに。読者の皆さんからのご意見も大歓迎ですので、どんどんコメントをお寄せください。（新川 志保子）

次回「そんりさ」印刷作業は東京で4月 日（土）、
 発送は関西で4月 日（土）の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

Vol.158 コロンビア・平和の陰の暴力

Vol.154 グアテマラ揺るがず関税汚職

Vol.157 ニカラグア・ワスパンの今

Vol.153 コロンビアを伝える旅

Vol.156 グアテマラ戦時下性暴力裁判

Vol.152 グアテマラ視察報告

Vol.155 メキシコ・ナルコ街道ゲレロ

Vol.151 メキシコ・ナルコ回廊

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』, 資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・手紙も

しくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

126万3621円

<グアテマラ基金>

106万4021円

(2017年1月現在)